

# 活動報告書

報告者氏名：岡田 悦子 所属：戸田市立喜沢小学校 記録日：2022年2月10日

キーワード：

## 【対象児の情報】

・学年

小学3年生の男児

・障害名

知的障がいを伴う自閉症

・障害と困難の内容

発語が難しく、自分の思いを表現する手段に乏しい児童

・使用した機器

iPad iPhone watch chromebook AIスピーカー Pepper

## 【活動目的】

・当初のねらい

- ①平仮名と音を結び付ける。
- ②ICTを活用しながら、言葉で表現することの楽しさを味わう。
- ③数字と数を結び付ける。

・実施期間

2021年5月～2022年2月

・実施者

岡田 悦子(特別支援学級担任)

・実施者と対象児の関係

特別支援学級の担当教員

## 【活動内容と対象児の変化】

### ・対象児の事前の状況

#### ○生活面

- ・学校生活には慣れ、2年間の経験から、周囲の様子を見て自分から行動できることも増えている。
- ・簡単な声掛けをすれば、授業準備や教室移動ができる。
- ・手先が器用で、細かい作業も数回練習するとできるようになることが多い。
- ・衝動性が高く、気になることがあると、急に走り出したり、立ち上がったことがある。

#### ○学習面

- ・10までの数字は順序良く書けるが、数とは一致していない。
- ・平仮名は、形・筆順よく視写することができるが、音と結びついていない。自分の名前は書ける。
- ・タブレットは好きで、簡単な操作が分かると集中して取り組むことができる。
- ・教科を問わず、課題の理解に時間がかかり、失敗することを恐れて、取り組もうとしないことがある。

#### ○コミュニケーション面

- ・発語がなく、促すと母音で発声しようとする。
- ・自分の思いを伝えたいときには、目で訴えて気づいてもらうか、「あ」と声を出すことも見られるようになってきた。
- ・自分の思い通りにならないときには、泣いて表現している。

### ・活動の具体的内容

#### ①平仮名と音(言葉)とを結び付ける。

<使用アプリ>

『もじと〜く!』



50音表から入力した文字を、読み上げてくれる。

頻度 ほぼ毎日



『もじと〜く』

自分の名前をまとまりで認識して書くことができるようになっていたので、名前の文字と音を結び付けるところから始めた。このアプリを使用して、平仮名を1文字入力後、読み上げ機能を使って読み上げるようにした。

この学習で取り組んだ平仮名の順序は以下のとおりである。

- ・名前の文字 →「ん・な・と・し・か・け・す」
- ・発音できていた母音 →「あ・い・う・え・お」
- ・発音するときの唇の動きが特徴的で、発音できるようになってきた文字 →「ま・む・め・も」

☆本児にとってのこのアプリの良さや成果☆

言葉を入力したあと、読み上げてくれるので、それをよく聞いている様子が見られた。また、少し促すと真似する様子も見られた。

『あいうえおにぎり』



平仮名1文字ずつや、絵と文字の一致。

頻度 ほぼ毎日

『あいうえおにぎり』

平仮名と音が結びついてきたものが増えてきてからこのアプリを使用した。

一音ずつ段階的に進めることや、分からなくても、文字をおすとそれを読み上げてくれるので、それを頼りにしながら絵と結び付けたりでき、楽しみながら一人で黙々と行っていた。正解するとゲームに進めるこでいたようだ。



☆本児にとってのこのアプリの良さや成果☆

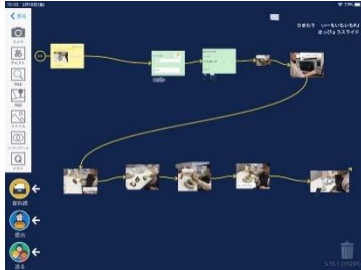
イラストと言葉が結びつくものが増えた。

### 『ロイロノート』



黒板を視写したり、平仮名を並べ替えて言葉を作ったりする。

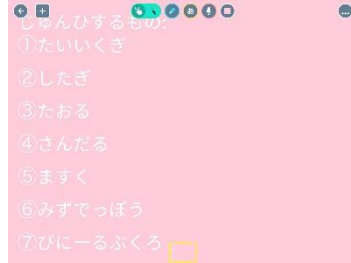
頻度 ほぼ毎日



### 『ロイロノート』

黒板やテレビ画面に映した文字を入力したり、絵を描いたりする学習をした。校外学習のしおりや、発表会の資料など、成果物もあり、本児も取り組んだ意味を理解しながら進めることができた。

また、Classroom などを通じて、保護者にも送信し、家庭でも成果を褒めてもらったり、会話の一端に入れてもらったりするようにした。



### ☆本児にとってのこのアプリの良さや成果☆

○写真をつなげたり、教師に送信したりが容易で、数回やるうちに自分でできるようになった。

○大型 TV に写した平仮名を入力できるようになったり、50 音表の中から平仮名を選ぶのがとてもスムーズになったりした。

○写真をつないだり、そこに言葉を入れたり、言葉の見本を用意してあげると、自分でできることの喜びを感じながら、一人でも進めることができるようになった。

### 『Canva』



テンプレートを使って、自分のや先生方の名刺をデザイン。

頻度 5～6回

### 『Canva』

本児だけでなく、学級全体で自分や全校の先生方の『名刺づくり』『ポスターづくり』に取り組んだ。自分の名前を入力したり、ことばを入れたりして平仮名にたくさん触れる機会となった。

また、少しずつ友達が言った平仮名を入力する活動も行った。わかる文字は、友達の言葉を聞いて入力したり、まだわからない文字は友達に教えてもらおうと素直に聞き入れて、入力していた。子供同士のコミュニケーションにもつながっていた。



### ☆本児にとってのこのアプリの良さや成果☆

○テンプレートがたくさんあるので、容易にデザイン豊かな製作物ができる。

○キーボードの平仮名入力が速くなった。

○友達同士のコミュニケーションにもつながり、本児が平仮名が分かるようになってきたことを、他の児童も「□□さんすごいね!」と本児を認め、喜びを共に感じる様子が見られた。

○先生方の名刺づくりを通して、本児の成長を、他の先生方も知っていただく機会となった。

その他、平仮名積み木を使った文字選びや文字並べなども取り入れ、目・手・耳で平仮名に触れる機会を多く設定した。

☆本児にとっての良さや成果☆

○ICTと併用することで、様々な角度から平仮名に触れることができ、パターン化ではない確実な力として身につけることにつながっている。

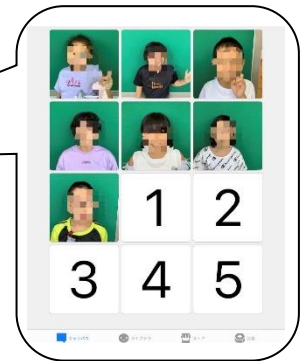


## ②ICT を活用しながら、言葉で表現することの楽しさを味わう。

### A 学校生活の設定された場面の中で言葉を使った表現の楽しさを味わう。

<使用アプリ>

『DropTalk』  
 朝の会の司会や  
友達の呼名、日  
直の号令など。  
頻度 月に2・3回



これまで、発語がほとんどないため、難しかった朝の会の司会や、日直の号令などを DropTalk を活用し取組んだ。学級全員の顔写真と名前を登録して、呼名ができるようにしたり、日直の言葉を登録しておき、本児が押せば、「これから勉強をはじめます」「おねがいます」と授業の終始のあいさつや朝の会の進行ができるようにした。

☆本児にとってのこのアプリの良さや成果☆

○写真と音声がはっきりしていて、分かりやすい。

○初めは、ボタンを押すと音が出ることを楽しんでいただけだったが、その意味と友達の名前が一致してきてからは、写真ボタンを押した後、その友達のところに行き笑顔で視線を合わす様子が見られるようになった。

### B 自分が伝えたいことを、周囲の教師などに伝える行動を育てる。

<使用アプリ>

『DropTalk』  
 自分の思いを簡  
単に伝える。  
頻度 毎日

DropTalk を常時机付近に置くようにし、自分から使えるようにした。

課題が終わったとき → 「できました」

物を取りに行きたいとき → その物の写真(ジャンパー・ふでばこなど)

☆本児にとってのこのアプリの良さや成果☆

○この表示にあるものを伝えたいときには、泣かずに、自分でボタンを押せるようになってきた。



### ③数字と数を結び付ける。

<使用アプリ>

『トドさんすう』 『かぞえ10』 『かぞえ10』



頻度 ほぼ毎日

『ロイロノート』  
数字を並び替えたり、音声を  
入れたり、読んだりする。

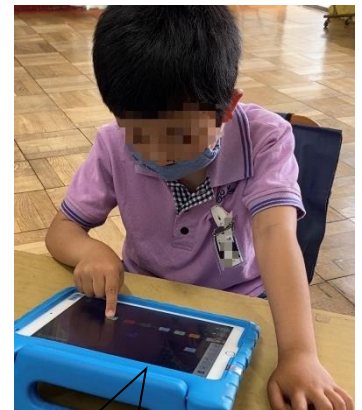
頻度 数回

1から10までの数字を順序よく書くことはできていたので、数唱ができるようになっていくことで、数との結びつきにつながるのではないかと考えた。そこで、まずは書いている近くで「いち、にーい、さーん…」と声に出して言ってあげるようにした。また、アプリ「かぞえ10」の「かぞえよう」を使って、アプリ上の物を動かすと、それに合わせて数を読み上げてくれる学習や問題形式に数唱を答える学習を行った。

他にも、ロイロノートで数字を提示して、数字を声に出しながら、10までの数字を並び替えるという活動も行った。その後、具体物やブロック、アプリでは『かずあそび』や『とどさんすう』を利用して、物の数を数えることに取組んだ。

☆本児にとってのこれらのアプリの良さや成果☆

○イラストや動きだけでなく、音声があることで、目で見て、音で聞いて確認したり、自分でも真似して数えたりしていた。



#### ・対象児の事後の変化

##### ①平仮名と音(言葉)とを結び付ける。

名前の文字から取り入れ、繰り返し行ったことで、身近に感じた様子で、その文字を言うと、平仮名のキーボードから選ぶことができるようになったり、自分で書けるようになった文字が増えてきている。また、一音ずつの口形模倣も同時に行うようにし、本人に発声を促した。また、当初からできていた母音での発音(例えば、「と→お」「な→あ」)ではあるが、自分の名前を一人で言うことができるようになった。

そして、名前のにも含まれている、唇を閉じてから発音する「ま行」に興味を持ち始めたため、ゆっくり唇を閉じて発音しつつ、アプリの中でその音のボタンを押す活動を取り入れると、あっという間に覚え、自分で発音できるようになった。

##### ②ICTを活用しながら、言葉で表現することの楽しさを味わう。

A 学校生活の設定された場面の中で言葉を使った表現の楽しさを味わう。

Droptalk を使い始めたころは、友達の写真を押すとその名前が発音されることがうれしくて仕方ない様子だった。そして、何度も繰り返しやっていく中で「〇〇さんはどれ?」と尋ねると、その子の写真を押すことができるようになった。これまでは、友達の名前を分かっていたのか、いなかったのかが不明だったが、この様子から、学級13名の友達の顔と名前が一致していることを確認することもできた。また、朝の会の司会にも挑戦し、司会の言葉



を教師のサポートのもと Droptalk で進行したり、呼名をしたりできるようになった。定型ではない言葉については、友達の名前を呼ぶことで、その子が代わりに話してくれるルールとなっている。自分の Droptalk の号令で、みんなが返事をしてくれたり動いてくれたりすることがとても嬉しそうで、日直を行うときは、いつも積極的に笑顔で行っている。

### B 自分が伝えたいことを、周囲の教師などに伝える行動を育てる。

当初は、自分の伝えたいことがあるときに、目で訴えることがほとんどであったが、現在では、声を出して教師を呼び止めたり、呼び止めながら顔をのぞき込んだりするようになった。また、DropTalk を自分から活用する場面も増え、課題が終わると、「できました」のボタンを押したり、廊下や他の部屋に取りに行きたいものがあると、その絵のボタンを押して伝えられるようになった。

### ③数字と数を結び付ける。

数字の順序→その発音→数の概念という流れで指導してきたことで、はっきりとした言葉ではないが(「いーひ、いーい、はーん」スムーズに数えることができるようになり、具体物を動かしたり、絵に印をつけたりしながら、自分で数えることができるようになってきている。また、数字と音も結びつき、10までの数字を書くことができるようになった。

数の概念も確立しつつあり、サイコロの目を数えて、駒を進める、すごろく遊びも楽しめるようになってきて、友達との関わりも増えてきている。



### 【それぞれの取組の成果とエビデンス】

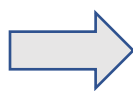
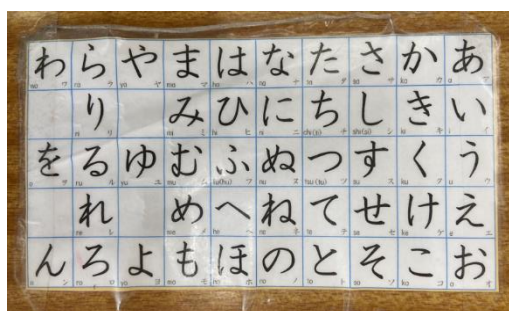
・主観的気づき

①平仮名と音(言葉)とを結び付ける。

5 月当初

1 月

平仮名と音が一致した文字 →20文字!  
(文字や言葉を言うと、書いたり入力したりできる文字)



OICT を使うことで、平仮名一つ一つに音があることを、主体的に学習することができていた。

○もともと平仮名を視写することは好きだったが、聞いた言葉も書けるようになって、さらに書くことを楽しんでいた。

ICT とアナログ(手書きなど)を併用していくことで、本児の意欲と理解につながっていた。

○アプリの学習を利用することで、正解と御解答が音や絵などで現されるので、本児も分かりやすかったようで自ら学習を進めることにつながっていた。

②ICT を活用しながら、言葉で表現することの楽しさを味わう。

自分の言葉で表現する(伝える)ようになった言葉(主なもの)	DropTalk を活用して伝えるようになった言葉(主なもの)
お・あ・よ(おはよう)	できました
あ・お・あ・あ(さようなら)	ジャンバー
あ・い・あ・お(ありがとう)	ふでばこ
お・い・え(といれ)	連絡袋
いい(いらない)	タブレット
あしゃ(せんせい?)	

○中には、促されたり、模倣したりして話すこともあるが、その都度、先生方や友達から「すごい!」「わかったよ」と言われるととても良い表情をして満足感にあふれていた。

○教師の声掛けに対し、返事やあいさつを返したり、ときには、簡単な言葉で返したりする場面も増えてきている。

△タブレットを机付近に設置していたが、常に持ち歩く習慣が確立できず、本児が伝えたいときに使えないことがあった。体育の授業時や休み時間など、常に持ち歩くことができるような鞆のようなものであったり、肩から掛けられる専用ポーチのようなものがあたりすると、本児にとっては扱いやすいのかもしれない。

<最後に>

本児は、大人との信頼関係を大切にし、小集団の中で丁寧な関わりをしていくことで、安心して力を発揮してきた児童である。

そんな本児が、ICT を活用することで、自分で伝え、それが成功したという経験から、自信をつけ、生き生きとした表情で過ごすことが増えている。そして、お互いを認め合い、できる喜びを感じ合うことで、友達同士の関わりにも少しずつつながってきている。今後も、コミュニケーションツールの一つとして、ICT を活用しながら、本児の笑顔と成長につなげていきたい。